

○高岡附諸士搬宅事略

今枝譜に云ふ。慶長十八年癸丑、瑞龍公御隠居地十萬石之内、以二萬石令附微妙院殿、各反金澤、重直其列也。俗曰、織田左門後藤、爲秀頼公之使、到高岡曰、秀頼公對德川家必起矛盾、可有與力乎否。瑞龍公仰曰、我蒙秀吉公厚恩、今何有不從命乎。慶長五年秋、石田三成矯公命、作我叛逆之時、一味德川家、討退逆徒、若德川家向秀頼公有異心、我必從命、乃隱居領之人數、不殘捧公、於筑前守利光者、雖愚息、今德川家之婿也、難計其心云々。後滅人數如本文、とあり。今枝直方自記にも、大坂逆亂前、秀頼公より瑞龍院殿を御頼被成度よし被仰遣時、御使は織田左門也。高岡へ來り、秀頼御口上之趣被申ければ、殿、奈何にも畏入承候。關原一卷之節も、治部少輔など仕形あしく、御爲だてを仕ながら、御爲にもならざる事仕出すに依つて、内府と一味いたし惡黨を退候ひき。君之御大事に至りては、いかにも御催に可應候。せがれ筑前守儀は、内府の婿に候へば、内府と一味可仕候哉。悴と申しながら心底不存候。私在世の内に候はゞ、隱居の人數不殘指上可申よし御

返事被成。其の後何となく、宗仁・神尾・富田を始として二萬石分を金澤へ被返し云々。と載せたり。家譜の趣と全く同じ。又關屋政春の古兵談に云ふ。慶長十八年の冬、秀頼公の爲御使、織田左門北國に下り、越前の今庄より、加州小松にて下人一人召連れ、歩にて參着。小松にて、前田對馬守家禮櫻井掃部と云ふ者元來家禮筋なるゆゑに、掃部所に一宿し、金澤・高岡の様子を聞合せ、翌日高岡に至りけり。利長卿對面有りて、秀頼公の御口上、東夷の躰近年の内に秀頼公を潰し可申休也。偏に利長を頼み思召との旨也。利長卿、私の儀は貴殿御覽之通病中にて、家の内をさへ不行歩の仕合にて、罷登り御馳走仕儀は難成。また筑前守儀は父子の間と乍申、是は關東將軍の掣なれば、如何様の儀を存知罷在も難計、唯今御請何とも難申上。隱居の人數は何時にて進上可仕。との御返事の由也。と見ゆ、三州志韃毘餘考には、慶長十六年辛亥、秀頼君の使として、織田左門頼長高岡城に來て公に内謁す。自註に云ふ。頼長は織田有樂長益の次男、時に秀頼君に仕へたり。今年三月廿八日、秀頼君始て二條城に來て神君に謁す。是より先秀頼君織田

左門を介として、瑞龍公に乞ひて曰く、若し大坂に戎事起らば、公之を救ひ給へと。公答へて曰く、我卿を抱くを以て出馬し難し。兵を出すべきも既に退老致仕の身なれば、手

兵幾ばくもなし。吾が兒利光事は關東の女婿たれば、渠が心底何とも知るべからずと也。或は云ふ。左門此の度大坂より先づ小松へ至り、前田對馬方に一宿し、其の翌日、家僕只一人を供し、二十里程を經、高岡の二上屋吉助方に至る。夫より登城、公と密談、且饗應畢りて、左門歸路に金澤に來り、高山南坊と舊友なれば、其の夜茗會をなす處へ、高岡より左門へ使を以て、二雁と一籠の甘橋を賜ふといへり。又此の左門の來るを、古典本には十五年に係く。然れども、年譜及菅家見聞集皆十六年となす。とあり。平次按ずるに、前顯今枝譜には十八年の事とし、古兵談には、十八年の冬とす。雁・甘橋などを左門へ賜はるとあれば、左門の來るは冬季か春季なるべし。駿府政事録に、慶長十九年十月十九日、去三月自大野修理亮所、加賀中納言利長方

遣一通、其狀之趣者。秀頼萬才覺彌逐日爲増進。漸時分此時候間。早有上洛。秀頼可有御指南云々。利長死去已

後。子息筑前守利光、以本多上野介指上之。とあり。右書簡の寫如左。

秀頼様事、御才覺彌追日令増長候。漸時節此時候。兵糧以下大坂有之分、福嶋左衛門大夫手前三萬石、秀頼様御藏米七萬石、其外商賣兵糧數多有之候間、早々上洛候而、萬端可有御指南候。恐々謹言。

三月朔日

大野修理亮治長 判

羽柴肥前守殿 御宿所

按ずるに、慶長十九年十月利光卿より、本多上野介を以て駿府へ差出されし書簡は、彼の織田左門が來れる後更に指越して、出兵の事を催促せし書簡なるか。但し、早々上洛候而萬端可有御指南との文言に據れば、織田左門が來れる時持參せし書簡ならん。若し然る時は、左門が來れるは十九年の春三月にて、利長卿薨逝の前なり。然れば十六年に高岡附の諸士をば多分金澤へ返されしは、早く大坂の事情を洞察せられたるものにて、織田左門が來るに依つて返されしやうにいへるものは、後人の過聞なるべし。三州志に、織田左門への公の答言甚だ味あり。無程養老知の内を